

# 日本人にとつての「市民」

中西寛

(京都大学大学院法学研究科教授)

Hiroshi Nakanishi

1962年生まれ。京都大学大学院法学研究科博士後期課程退学。京都大学法学部助教授を務める間に、文部省在外研究員としてロンドン大学政治経済校、オーストラリア国立大学に在籍。専門は、国際政治学。著書に『国際政治とは何か』（中公新書）など。

## 「壁と卵」

すでに旧聞に属する事だが、村上春樹が二〇〇九年にイスラエルでエルサレム賞を受賞した際、「壁と卵」という題名の演説を行った。その少し前までイスラエルがガザ地区に対して激しい攻撃を行っていたために、村上がエルサレム賞を受け取るためにイスラエルに赴いたことについては論争が巻き起こった。それに伴って「壁と卵」

という演説もよく知られることになったが、その内容について掘り下げた分析は行われなかったようである。日本の多くの論争と同じように、一過性の注目の一方で論争は上滑りなままに終わってしまったのである。その内容は、本論の主題を考える上で好い手がかりと思うので、まずこの演説についてとりあげたい。

「壁と卵」の核心部分は、次のような内容である。

「もしここに硬い大きな壁があり、そこにぶつかっ

て割れる卵があったとしたら、私は常に卵の側に立ちます。／そう、どれほど壁が正しく、卵が間違っていたとしても、それでもなお私は卵の側に立ちます。正しい正しくないは、ほかの誰かが決定することです。あるいは時間や歴史が決定することです。もし小説家がいかなる理由があれ、壁の側に立つて作品を書いたとしたら、いったいその作家にどれほどの値打ちがあるでしょう？」（村上春樹、二〇〇九）

この部分に続けて村上が語っているように、当時の状況においてすぐ思いつくのは、壁に国家権力、とりわけイスラエルのガザ攻撃に見られたような剥き出しの暴力の主体を指差し、卵はそうした攻撃にさらされる無辜の市民をメタファーしたものとする理解であろう。つまり、壁ではなく、卵の側に立つという表現で、村上は婉曲的にイスラエルを非難し、ガザ住民に同情の意を暗示した、という理解である。もちろん村上は一見そのように理解されることを前提とした上でこの文章を書いている。しかし演説をよく読めば村上の本意がそこにはない、より正確には、そこには留まっていなことが分かる。壁と

卵とは単に暴力的な国家権力とそうした権力の犠牲となる市民の言い換えではなく、壁とは「システム」であり、卵とは尊厳ある「個人の魂」だと。そしてこの表現は、先に引用した文章の前に、村上がエルサレム賞の受賞を決め、エルサレムでスピーチをすることを決めた理由として、「あまりに多くの人が『行くのはよした方がいい』と忠告してくれたから」と述べている部分とつながってくる。すなわち、村上にとっては、「受賞はイスラエル政府の行動を支持することになりかねない。行くのはよした方がいい」という「正論」が壁だったのであり、それに対して「自分の目で物事を見、触ることを選ぶ」ことが卵の側に立つ、ということだったのである。この点は、帰国後のインタビューに対して村上が「自分は安全地帯にいて正論を言い立てる人も少なくはなかったように思えます。たしかに正論の積み重ねがある種の力を持つこともありますが、小説家の場合は違います。小説家が正しいことばかり言っていると、次第に言葉が力を失い、物語が枯れてきます。僕としては正論では収まりきらぬものを、自分の言葉で訴えたかった」と語っているところからしても明らかだろう。（村上、二〇〇九）